

オチヨナナ映画倶楽部 No.107 資料 (2017.08.26)

ドローン・オブ・ウォー

原題：GOOD KILL



2014年／アメリカ／104分／カラー

監督・脚本：アンドリュー・ニコル

製作：ニコラス・シャルティエ／ゼブ・フォアマン／マーク・アミン

製作総指揮：パトリック・ニューウォール

キャスト

トミー・イーガン：	イーサン・ホーク
ジョンズ：	ブルース・グリーンウッドジョンズ
スアレス：	ゾーイ・クラビッツ
ジマー：	ジェイク・アベル
モリー：	ジャニュアリー・ジョーンズ

I はじめに

8月は6日と9日のヒロシマ・ナガサキ、15日の終戦記念日、そして520人の命を奪った12日の日航ジャンボ機墜落事故、と慰霊と鎮魂の月です。

先日、大学の同じ寮にいた同期生と地下鉄でバッタリと出会い、本当に久しぶりに山田純一郎さんらと「飲みました。彼は大学を出て一般企業に短い期間勤めて、パイロットになった少々変わった経歴の持ち主で、「星の王子さま」やテグジュベリのことなど話しました。

そんなこともあり、松本清張の『一九五二年日航機「撃墜」事件』（角川文庫）と、いま話題の書、青山透子著『日航123便 墜落の新事実 目撃証言から真相に迫る』（河出書房新社）を読みました。清張は木星号事件について、三度書いています。文庫は亡くなるまで手を入れていた作品で、その執着の凄まじさを実感させられました。日本が講和条約で国際社会に復帰する直前の事故でした。

疑惑の最大のポイントは何故、米軍が全員救出などという嘘の情報を流し続け、墜落場所を伊豆大島と分かっていたにもかかわらず、他の場所へと誤誘導したか、でした。

しかし、独立して30年以上を経た1985年8月に、なぜ同じような疑惑を生んだ日航機事故が起きたのか？ 青山さんの本は決して上手に整理された本ではありませんが、本で紹介されている地元小中学生が見たこと、その手記には大変な迫力があります。

木星号、162名が亡くなった1971年の雲石衝突事故、御巣鷹山の事故、をつなぐ視点が必要だなと感じました。米軍の関与、軍・民間の航空エリアの問題などなど。そしてそれは決して過去のことではなく、沖縄で事故を起こし、先日もオーストラリアで3名が死亡したオスプレイのことと重なります。

私たちは空のことを少し注意して知る必要がありそうです。北のミサイルが今朝も日本海方面に発射されたといまニュースで流れています。そして、沖縄だけでなく本州にも配備されるオスプレイ（あまりに事故が多いために未亡人製造機の別名があります）、そしてドローン。

今日はそのドローンについての映画です。ただ、『ドローン・オブ・ウォー』の映画パンフレットは入手できませんでした。ネットでもパンフのところが×になっているので作られていないのかもしれませんが。それで、同じくドローン戦争を扱った『アイ・イン・ザ・スカイ 世界一安全な戦場』（2015年・イギリス）の映画パンフレットなどから引いて、説明してみようと思います。

II Good Kill と世界一安全な戦場

先日、日本橋高島屋に、沢田教一さんの写真展に行ってきました。夫人のサタさんと一昨年の11月に青森でお会いしたことがあります。

展示場の最後に7分ほどの映像が流れていて、ベトナム戦争資料館の女性の館長が

沢田教一さん、石川文洋さんの写真にはアジア人に対する慈愛がある、といった趣旨の発言をしていたのが印象に残りました。確かに、戦火の中を逃げ惑う母子、お年寄りを庇いながらの青年などに注がれた沢田さんの視線の柔らかさ、温かさ。同時に若い米兵たちにも優しい目でファインダーを覗いていることがとても分かりました。

唐突に彼らの写真は日本の戦後社会が生んだものなのだな、という感慨が湧きました。戦争というものへの嫌悪感、被害者への共感、そしてアメリカに対するある種のシンパシーなど。ピューリッツァー賞をとった有名な写真「安全への逃避」の写真とタイトルが一番そんなことを表現しているように思えて。

その彼が「戦争って破壊であり、人と人との殺し合いである」とサタさんに語っていたと当日売っていた『沢田教一 プライベートストーリー』（2005年・くれせんと出版部）にありました。

しかし、それから50年、「戦争って破壊であり、電子兵器・殺人口ロボットによる人の殺戮である」と言い直さなくてはならない事態がいまではないのか、とこの映画を観ると思ってしまうことでしょう。

何よりもそれを現しているのが「Good Kill」というタイトル。

殺人に good も bad もないと思いますが、ミサイルを標的にあて、何人かを殺した後にオペレーターたちが声を合わせて「Good Kill」と言い合うことの異常さ。

そしてそのオペレーターたちが声を出している場所は殺人の行われている地球の裏側にある米国の基地（映画ではあの人工の娯楽都市ラスベガスの近く）からです。ですから「世界一安全な戦場」というわけです。

実は、映画のパンフレットもないため、ドローンというものを知らなくてはと2日前に河鐘基『ドローンの衝撃』（扶桑社新書）と井上孝司『ドローンの世紀』（中央公論新社）の二冊を新宿の紀伊国屋に買って来ました。

ところが昨夜、山田純一郎さんから図書館で見つけたと『I/O アイオー』（2017年9月号 工学社）を添付で送ってきてくれました。資料にしてあります。

Ⅲ ドローンというもの

ドローンとは「無人で遠隔操作や自動制御によって飛行できる航空機の総称」（参照：新語時事用語辞典）のこと。ドローンは、雄蜂を指します。

いま、一般的に認知されているのは民生用のドローンで、宅配用だとかその可能性の大きさを煽っています。

しかし、ここでは軍事目的の「ドローン」です。大から小にその種類も、形態も沢山あります。前出の『アイ・イン・ザ・スカイ』では、昆虫のような超小型のドローンが出て来ました。資料として手投げ発進式のミニ UAV や大型無人偵察機 RQ-4 グローバルホークなどの写真を入れてあります。

映画の関連で。レーザー担当者とミサイル発射者の二人のオペレーターが必ずペアで出てきます。これは命中させたい目標に対してレーザー・ビームを照射する必要があるからです。ミサイルは、そのレーザー・ビームの反射波をたどって目標に誘導さ

れます。

映画の無人機の機種は私には特定できませんが、2001年に偵察機であった RQ-1 プレデターの武装型が登場します。搭載しているのは AGM-114 ヘルファイア 対戦車ミサイルでした。プレデターは捕食者・略奪者の意味、ヘルファイアは地獄の業火ですね。

MQ（攻撃するので Reconnaissance 偵察から M マルチに変更）プレデターより大型の MQ-9 リーパーはミサイルの数が多く、ヘルファイアより威力の大きい 500 ポンドのレーザー誘導爆撃・GBU-12/B ベーヴウェイ II の搭載も可能です。この二つがアメリカの代表的な大型攻撃型ドローンです。

このドローン攻撃による死者数、2016年7月のオバマ大統領が発表した殺害数は2009年から2015年の6年間で2372人から2581人。ここにはアメリカと「戦争」をしているイラク、アフガニスタン、シリアの殺害数は入っていない。つまり、映画の2010年アフガニスタンはカウントされていないのです。

つい最近のニュースを二つ入れておきます。

○「殺人ロボット」早期禁止を AI 開発者ら、国連へ訴え： …

「殺人ロボット」と呼ばれる自律ロボット兵器の規制を話し合う初の国連専門家会議が11月に延期されたことを受け、人工知能（AI）やロボットを開発する企業の創業者や科学者らが21日、これら兵器の早期禁止を国連に迫る公開書簡を発表した。

この会議は、非人道的な兵器を規制する「特定通常兵器使用禁止制限条約（CCW）」の枠組みの下で8月に開かれる予定だったが、資金不足でいったん中止された。公開書簡は、電気自動車「テスラ」や宇宙企業「スペースX」を率いるイーロン・マスク氏ら、26カ国116人のロボット科学者や人工知能企業の創業者が署名し、オーストラリアで開かれた世界最大の人工知能会議（IJCAI）で発表された。人工知能とロボット双方の企業が共同歩調を取ったのは初という。（略）

もう一点、アフガニスタンからの撤兵を約束していたトランプ大統領は、期限を切らずに勝利すると方針を変更しました。昨日の『毎日』の社説です。

——アフガンでは既に2400人の米兵が死亡した。トランプ氏は演説で「甚大な犠牲」に見合う結果を出さねばならないと説く一方、オバマ前政権の「拙速で誤ったイラク撤退」が「力の空白」を生み、過激派組織「イスラム国」（IS）などの台頭につながったとの認識を示した。——

再び、アフガニスタンがこの映画で描かれたと同様、いやそれ以上の目に見えない恐怖の空の下の生活を余儀なくされることとなります。

IV 無人攻撃と人権の関係

以下はこの映画関係者のコメントです。監督のアンドリュー・ニコル監督は「観客の気分を悪くしたい。これは不愉快な現実だから」と言い、イーガンの上官・ジョーンズを演じたブルース・グリーンウッドは「この問題から目をそらさず、真剣に議論し

てほしい。そこに作品の意義がある」と語っています。

—— [映画.com ニュース]

名作「ガタカ」のアンドリュー・ニコル監督とイーサン・ホークが再タッグを組んだ「ドローン・オブ・ウォー」で、メイキングとインタビュー映像が公開された。

映画は、アメリカ空軍のトミー・イーガン少佐（ホーク）が、ラスベガスの基地から戦闘用の無人航空機（ドローン）を操縦して敵国を空爆する任務のなかで、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しめられるさまを、家族との関係も織り交ぜながらリアルに描く。

室内にいながら、スイッチ 1 つで対象を殺害するという対テロ戦争の衝撃的な現状を描いた本作。

これまでに、テクノロジーと人間の関係性を問う作品を発表してきたニコル監督は、「これが現実だと見せたかった。まるで空想のようだが現実の科学だ」と警鐘を鳴らす。「観客の気分を悪くしたい。これは不愉快な現実だから」とまで言っただけ、多くの人々にこの事実を知ってほしいと訴える。

その言葉に賛同するのは、イーガンの上官・ジョーンズを演じたブルース・グリーンウッド。「この問題から目をそらさず、真剣に議論してほしい。そこに作品の意義がある」と神妙な面持ちで語った。

イーガンの妻・モリー役のジャンユアリー・ジョーンズと、イーガンの右腕となる新米の女性空兵スアレスに扮したゾーイ・クラビッツといった女優陣は、兵士の状態を指摘する。「主人公の仕事に起きた大きな変化が家庭の崩壊につながり、彼は苦しむの。これを見た人に、今まで知らなかったことに気づいてほしい」（ジョーンズ）、「戦争は人間が行うもの。人間性を取り去ると感覚を失って、自分が何をしているのかちゃんと理解できなくなる」（クラビッツ）。

繊細な演技でイーガンの苦悩を体現したホークは、3 度目のタッグとなるニコル監督の手腕を「アンドリューにしかできない仕事だ。彼は政治に明るく、鋭い問題提起をしてくる」と高く評価。「これは実際に起こっていることだ。とてもリアルで不安定な現状だ」と作品のテーマに言及しつつ、「兵士たちの関係を扱った映画はよくあるが、一兵士を掘り下げるには背景が必要だ。

イーガンは家庭を大事にしている。その家庭と仕事の対比が面白いところだ」とさらに踏み込んだ意見を述べている。映像ではメイキングのほか本編シーンも満載で、ジョーンズが兵士たちに「諸君の半分はゲームセンターでリクルートされた」と耳を疑いたくなるような発言をするさまも確認できる。

次は映像作家の森達也さんと軍事評論家の小川和久の対談から。

—— 小川氏は、同じくドローン戦争を題材にした「ドローン・オブ・ウォー」を引き合いに出し、「『ドローン・オブ・ウォー』で強調されたのは、パイロットは常

に躊躇するという点。本作では、人権意識をどう整理するかを今一度考えられた」と語りつつ、映画「ブラックホーク・ダウン」でも描かれたソマリアの将軍の捕獲作戦の失敗が転換期となり、「人的被害を避ける」ためにドローンの投入が加速されたと解説した。

小川氏の言葉に聞き入っていた森監督は「戦争は最大の矛盾。人類は進化しているのに、なぜ今だに戦争をしてしまうのか。ジレンマの集大成が、ドローンによって表れてしまった」と考察。「人を殺す実感がない」（森監督）ドローン投入に象徴される“戦争の合理化”に警鐘を鳴らしていた。

この映画では戦時（人殺し）と平時（バーベキュー）とを行き来しなくてはならないオペレーターの心理的負担、家族にも仕事の内容を語れないストレスが丁寧に描かれています。前出『ドローンの世紀』はこの点について、ドローンのニーズが増してきたため、UAV オペレーターが加重負担になり、戦闘機パイロットが年間平均 250 時間ぐらい飛んでいるのに対し、UAV オペレーターは年間 900 時間ぐらいの任務に達している、ことを指摘。

—— このメンタルヘルスの問題、そして先に取り上げた処遇や軍内部での意識の問題は、2015 年 10 月公開の映画「ドローン・オブ・ウォー」の中でリアルに描き出されている。主人公は F-16 のパイロットから UAV に転換したのだが、オペレーターとして腕が立つのが結果的に災いして、UAV の担当から外してもらえない。

そして、自分が撃ったミサイルで人が吹っ飛ばされる場面を毎日のように見ている。監視対象のタリバン幹部（？）が、使用人の女性に暴行をはたらく様子まで、高解像度映像で見せられてします。

任務が終って、地上管制ステーションのトレーラーを出ると、クルマで帰途について、子供を迎えに行ったり、家族でバーベキューをやったりしている。任務そのものに加えて、そうした日常生活とのギャップに苦しむ様子が映画になったわけだが、モデルになった空軍の軍人にいわせると「実際はもっと辛かった」そうである。

また、けっこうな長さになってしまいました。

9 月は三連休の初日の 23 日ですが、スケジュールどおりにやります。

上映の候補作品は『イミテーション・ゲーム エニグマと天才数学者の秘密』（2014 年・英米・115 分）です。

いまのような時代を生み出したのはコンピュータに起因すると思いますが、コンピュータの概念を初めて作り出した男アン・チューリングの話です。主演を演ずるのはカンバーバッチです。